

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
コラボ研修プログラム	事業名：【NITS・連合教職大学院（奈良女子大学）コラボ研修】 協働探究ラウンドテーブル奈良 2023—JALOODA との対話 3・21 世紀を生きる人間像を描く—
支援事業報告書	研修等名：【NITS・連合教職大学院（奈良女子大学）コラボ研修】 協働探究ラウンドテーブル奈良 2023—JALOODA との対話 3・21 世紀を生きる人間像を描く—
	開催日時：令和 5 年 11 月 23 日 10:00～16:30 開催場所：奈良女子大学（奈良県奈良市北魚屋東町） 参加人数（総数）と参加者の属性：参加者数（120 人）、属性：教師・おとな 51 人、高校生 59 人

内容：

「令和の日本型学校教育」の実現において鍵を握るのが「探究的な学習」にある。しかし、「探究的な学習」における学習指導のむずかしさの一つは、生徒とともに学ぶことについて、教師がイメージを描きにくいところにある。この課題を解決するために、連合教職大学院（奈良女子大学）では、2019 年より、高校の中堅教師を対象とした、教師と生徒が共通の課題について対話を重ねながら理解を深めていく教員研修を研究開発してきた。教師は生徒から学ぶ。それならば、教師が生徒とともに学び合いながら、専門性を磨き上げることができる研修が必要となる。このような問題意識で開発したのが「協働探究ラウンドテーブル」である。

本申請事業では、一昨年度、昨年度に引き続き、日本航空株式会社（JAL）の産学連携部に協力いただき、21 世紀を生きる人間像をめぐる探究的対話を行った。

よりよく生きるためには質の高い人間像が必要となる。しかし、目まぐるしく変転する予測困難な時代を生きているからこそ、目の前の現実に追われ、大人も子どもも、自らが描いている人間像をじっくりと吟味する機会は少ない。本申請事業の目的は、21 世紀を生きる人間像をめぐる探究的対話を行うことにより、学習の展開過程で学んでいることにとどまらず、その後の人生における学びの持つ意味をつまびらかにすることを通じて、「探究的な学習」の学習指導のイメージを豊かに描くことができるようにし、各学校における「探究的な学習」の質的向上に資することにあった。

本研修を 3 つの Session で構成した。各 Session が「授業」であり、教師と生徒による対話が「探究活動」となる。参加者を対話状況に置き続けることにより、協働探究型研修を実現した。

Session1 は「私の中にある学びの物語をめぐる対話」である。「探究的な学習」の学びのさなかにある教師と生徒、学びを経て社会人となったかつての生徒、そして学びに伴走している教師・おとなの「語り」を、人間形成の視点から聴き、対話を行った。窪田勉氏（兵庫県教育委員会指導主事）がモデレーターを務めた。はじめに川畠慎之介さん（静岡県立駿河総合高校 3 年生）、濱田のどかさん（奈良女子大学附属中等教育学校 5 年生）、黒沼玲亜さん（市立札幌大通高校の卒業生）に自らの「探究的な学習」の経験を語ってもらい、学びの持つ意味をめぐる対話を行った。そのうえで、3 名の学びに関与した、間宮純也氏（有限会社春華堂）、小林龍一氏（DMG 森精機）、伊藤新氏（株式会社北海道アルバイト情報社）に加わっていただき、伴走者としての経験を語っていただいた。生徒たちの学びの語りを受けて感じ考えたことにとどまらず、そこから広がる世界へと学びを進めることこそに学びの持つ意味があることが語られた。さいごに、「探究的な学習」の担当教師である遠藤健氏（駿河総合高校教諭）、北尾悟氏（奈良女子大学附属中等教育学校副校長）、西野功泰氏（札幌市教育委員会指導主事）に対話に加わっていただき、9 名で学びの持つ意味について掘り下げていった。学びの展開過程を支え促すためには、その時々課題に寄り添うだけでなく、そこにおける学びがその後の人生においてどのような意味をもつのかに留意することが学びの設計者に求められることが語り出された。

Session2 は「私たちの中にある学びの物語をめぐる対話」である。高校生と教師・おとな（教育行政、民間、研究者など）を混在させた 1 組 4～5 名のグループを 25 組つくり、高校生の学びの物語を聴くことを通じて、学びの経験の持つ人間形成上の意味を協働探究した後、21 世紀を生きる人間像をフリップに一言で表現し、全体で共有した。先述の窪田氏、西野氏、遠藤氏と同様に、本申請事業に設計段階から関与してもらっている平野淳也氏（札幌市立清田高校教諭）、吉村順氏（静岡県立沼津城北高校教頭）、永田卓裕氏（福井県立武生高校教諭）、福島昌子氏（福井大学連合教職大学院・教授）他 9 名を要所に配置することにより、対話が円滑にすすむ雰囲気を創り出していった。そのことが功を奏し、生徒はもとよりおとなからも自らの学びについて言葉があふれ出していた。

Session3 は「『自律型人間』という物語」である。JAL の現役の機長である片桐氏に、JAL グループが目指している「自律型人間」について講演いただき、参加者との対話を通じて、21 世紀を生きる人間像について理解を深めていった。各自の描く人間像が編み込まれながら対話が進められていった。

リフレクションでは、今日の学びの経験を形象化し、全体で一つの作品をつかった。佐藤隼氏（奈良市立一条高校教諭）がモデレーターを務めた。本事業における学びの経験をカラーペーパーに一言で表現してもらい 100 インチのスクリーンに掲示をし、全員で共有した。

なお、研修効果を検証するために、後日、Google フォームにて参加者評価アンケートを実施し、その結果を参加者と共有するとともに、JAL の産学連携部と研修効果について意見交換を行った。

成果：

Google フォームを用いて事後アンケートを実施し、量的・質的評価を行った。

量的評価としては、教師・おとなの参加者（回答率 88.2%）のうち「たいへんよかった」89.0%、「よかった」11.0%であった。高校生の参加者（回答率 66.3%）のうち「たいへんよかった」77.4%、「よかった」20.3%、「ふつう」2.3%であった。全体として「たいへんよかった」83.2%、「よかった」15.7%で高い評価が得られた。

質的評価としては、本ラウンドテーブルで学びとったことを記述してもらった。特徴的な記述として、高校生では「自分が感じ考えていることを交わし合うことで互いの理解が深まること」「探究学習が人生を創ることにつながっていること」「社会とつなげてものごとを考えることの重要性」が寄せられた。教師・おとなでは、「対話を中心に据えた授業や研修設計について具体的に学ぶことができた」「教師としてのあり方を見つめ直した」「高校生の持つ潜在的な力を目の当たりにした」が寄せられた。

これらの結果をふまえ、教員研修としての成果として考えられるのは以下の 3 点である。

- (1) 生徒と教師が学び合うことを中核に据えた協働探究型の学びの姿を具体的に示すことにより、学習観、研修観の転換を支援することができた。
- (2) 教師においては「探究的な学習」における学習指導における留意点の獲得はもとより、「校内研修コーディネーター」としての資質・能力の向上させることができた。
- (3) 「実践コミュニティ」（多様な主体が差異を活かして学び合う場）の具体例を示すことにより、それぞれの現場におけるその形成の契機を創り出した。

アイデアや工夫したこと：

- (1) 運営を担う中核メンバーに設計段階から参画してもらうことにより、「校内研修コーディネーター」としての資質・能力の形成を促す研修としての要素を組み込んだ。
- (2) 本事業の目的を実現するために、また、研修効果を高めるために JAL と綿密な打ち合わせを行った。
- (3) 各自の学びを言語化し、モザイク状に全体として作品化するリフレクションを通じて、個別最適な学びと協働

的な学びを統一的に実現する方法を具体的に示すことである。

<写真・図など>



Session1



Session2



Session3



リフレクション